

区分別科目名	呼吸器（気道確保に係るもの）関連		時間数の総計 10		
特定行為区分に含まれる特定行為に共通して学ぶべき事項	気道確保における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理	1. 気道確保に関する局所解剖 2. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整に関する病態生理 3. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整に関するフィジカルアセスメント 4. 経口又は経鼻気管挿管の目的 5. 経口又は経鼻気管挿管の適応と禁忌 6. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの種類と適応 7. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブによる呼吸管理 8. バックバルブマスク（BVM）を用いた用手換気	講義	4.5	5
	気道確保の基礎知識		試験	0.5	
特定行為ごとに学ぶべき事項	特定行為： 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整	1. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整の目的 2. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整の適応と禁忌 3. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整に伴うリスク（有害事象とその対策等） 4. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整の手技	講義	4.5	5
			試験	0.5	
			OSCE		
			実習	5症例	
担当指導者					
学習目標	気道確保の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	気道確保における呼吸器系の基礎 知識解剖と病態生理 気道確保の基礎知識	気道確保における呼吸器系の解剖と病態生理の知識を身につける 気道確保の知識・技術の基礎を身につける、気管挿管の知識・技術の基礎を身につける		
		特定行為： 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整	多様な臨床場面において、経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整の実施の可否判断、実施および報告の一連の流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける		
研修方法 研修場所	気道確保における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理 気道確保の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
		講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	特定行為： 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習 実技レクチャー 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院	
		実習	患者に対する実技5症例 手順書の再評価	場所：太田西ノ内病院	
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにEラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 講義により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 「特定行為：経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整」では実技試験（OSCE）を行う 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価				

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2	気道確保における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理	呼吸器系の構造・機能 呼吸器系の診察・検査・画像 呼吸器系の症候・疾患	講義 (放送授業)	2.5
2	3, 4, 5, 6, 7, 8	気道確保の基礎知識	気道確保の目的・適応 気道確保の方法 気管挿管の目的・適応 気管挿管の方法 気管挿管時のフィジカルアセスメント	講義 (放送授業)	2
3	1, 2, 3, 4	特定行為： 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整	経口・経鼻気管チューブの位置調整の目的・適応と手技 経口・経鼻気管チューブの位置調整の判断 経口・経鼻気管チューブの位置調整に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	1.5
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートに記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けてどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
4	科目最終試験		共通して学ぶべき事項 (30分) 気道確保における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理 気道確保の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項 (30分) 特定行為：経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整	筆記試験 (対面またはE-ラーニング上での実施)	1
5	OSCE	経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整		実技試験	
6	実習 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	呼吸器（人工呼吸療法に係るもの）関連		時間数の総計 18		
特定行為区分に含まれる特定行為に共通して学ぶべき事項	人工呼吸療法における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理	1. 人工呼吸療法の目的 2. 人工呼吸療法の適応と禁忌 3. 人工呼吸療法に関する局所解剖 4. 人工呼吸療法を要する主要疾患の病態生理 5. 人工呼吸療法を要する主要疾患のフィジカルアセスメント 6. 人工呼吸器管理の適応と禁忌 7. 人工呼吸器のメカニズム・種類・構造	講義	5.5	6
	人工呼吸療法の基礎知識		試験	0.5	
特定行為ごとに学ぶべき事項	特定行為： 侵襲的陽圧換気の設定の変更	1. 侵襲的陽圧換気の設定の目的 2. 侵襲的陽圧換気の設定条件の変更の適応と禁忌 3. 侵襲的陽圧換気の設定条件の変更に伴うリスク（有害事象とその対策等） 4. 侵襲的陽圧換気を選択と適応 5. 侵襲的陽圧換気の設定条件の変更方法	講義	4	6
			演習	1.5	
			試験	0.5	
	特定行為： 非侵襲的陽圧換気の設定の変更	1. 非侵襲的陽圧換気の設定の目的 2. 非侵襲的陽圧換気の適応と禁忌 3. 非侵襲的陽圧換気の設定条件の変更に伴うリスク（有害事象とその対策等） 4. 非侵襲的陽圧換気の設定条件の選択 5. 非侵襲的陽圧換気の設定条件の変更方法	講義	4	6
			演習	1.5	
			試験	0.5	
			実習	5症例	
	担当指導者				
学習目標	人工呼吸療法の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	人工呼吸療法における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理 人工呼吸療法の基礎知識	人工呼吸療法における呼吸器系の解剖と病態生理の知識を身につける 人工呼吸療法の知識・技術の基礎を身につける		
	特定行為： 侵襲的陽圧換気の設定の変更	特定行為： 侵襲的陽圧換気の設定の変更	多様な臨床場面において、侵襲的陽圧換気の設定の変更を行うための知識・技術の基礎を身につける		
	特定行為： 非侵襲的陽圧換気の設定の変更	特定行為： 非侵襲的陽圧換気の設定の変更	多様な臨床場面において、非侵襲的陽圧換気(NPPV)の設定の変更を行うための知識・技術の基礎を身につける		
研修方法 研修場所	人工呼吸療法における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理 人工呼吸療法の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	特定行為： 侵襲的陽圧換気の設定の変更	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	特定行為： 非侵襲的陽圧換気の設定の変更	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院
		演習（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	事例検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院
		実習	患者に対する実技 5 症例 手順書の再評価		場所：太田西ノ内病院
評価方法	講義（放送授業）：各單元ごとにEラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 演習（面接授業）：グループディスカッションの観察評価、レポートの内容評価を行う 講義・演習により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価				

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	3, 4	人工呼吸療法における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理	呼吸器系の構造・機能 呼吸器系の診察・検査・画像 呼吸器系の症候・疾患	講義 (放送授業)	3.5
2	1, 2, 5, 6, 7	人工呼吸療法の基礎知識	人工呼吸療法の目的・適応 人工呼吸器の構造 人工呼吸療法に関するフィジカルアセスメント 人工呼吸療法中に起こりうる有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2
3	1, 2, 3, 4, 5	特定行為： 侵襲的陽圧換気の設定の変更	侵襲的陽圧換気療法の適応 侵襲的陽圧換気療法における酸素化と換気の評価 侵襲的陽圧換気の設定と変更方法 侵襲的陽圧換気療法におけるアラームへの対処	講義 (放送授業)	2.5
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示された侵襲的陽圧換気の設定の変更の事例について、ワークシートを記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
4	1, 2, 3, 4, 5	特定行為： 非侵襲的陽圧換気の設定の変更	非侵襲的陽圧換気療法の目的・適応 非侵襲的陽圧換気の設定方法 非侵襲的陽圧換気療法における有害事象とその対策 非侵襲的陽圧換気療法の装着と管理	講義 (放送授業)	2.5
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示された非侵襲的陽圧換気の設定の変更の事例について、ワークシートを記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
5	科目最終試験		共通して学ぶべき事項 (30分) 人工呼吸療法における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理 人工呼吸療法の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項 (30分×2) 特定行為：侵襲的陽圧換気の設定の変更 特定行為：非侵襲的陽圧換気の設定の変更	筆記試験 (対面またはE-ラーニング上での実施)	1.5
6	実習 侵襲的陽圧換気の設定の変更		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
7	実習 非侵襲的陽圧換気の設定の変更		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	呼吸器（長期呼吸療法に係るもの）関連		時間数の総計 10		
特定行為区分に含まれる 特定行為に 共通して 学ぶべき事項	長期呼吸療法における呼吸器系の 基礎知識 解剖と病態生理  長期呼吸療法の基礎知識	1. 気管切開に関する局所解剖 2. 気管切開を要する主要疾患の病態生理 3. 気管切開を要する主要疾患のフィジカルアセスメント 4. 気管切開の目的 5. 気管切開の適応と禁忌 6. 気管切開に伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義	4.5	5
			試験	0.5	
特定行為ごとに 学ぶべき事項	特定行為： 気管カニューレの交換	1. 気管カニューレの適応と禁忌 2. 気管カニューレの構造と選択 3. 気管カニューレの交換の手技 4. 気管カニューレの交換の困難例の種類とその対応	講義	4.5	5
			試験	0.5	
			OSCE		
			実習	5症例	
担当指導者					
学習目標	長期呼吸療法の基礎を理解し、 特定行為を適切に行うための知識・ 技術を身につける	長期呼吸療法における 呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理  長期呼吸療法の基礎知識	長期呼吸療法における呼吸器系の解剖と病態生理の知識を身につける  長期呼吸療法(気管切開)の知識・技術の基礎を身につける		
		特定行為： 気管カニューレの交換	多様な臨床場面において、気管カニューレの交換の実施の可否判断、実施および報告の一連の 流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける		
研修方法 研修場所	長期呼吸療法における呼吸器系の 基礎知識 解剖と病態生理  長期呼吸療法の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
		講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	特定行為： 気管カニューレの交換	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面ま たはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習  実技レクチャー 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院	
		実習	患者に対する実技 5 症例 手順書の再評価	場所：太田西ノ内病院	
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 講義により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 「特定行為：気管カニューレの交換」では実技試験（OSCE）を行う  実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価				

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3	長期呼吸療法における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理	呼吸器系の構造・機能 呼吸器系の診察・検査・画像 呼吸器系の症候・疾患	講義 (放送授業)	3
2	4, 5, 6	長期呼吸療法の基礎知識	気管切開の目的・適応 気管切開の方法 気管切開に伴う合併症	講義 (放送授業)	1.5
3	1, 2, 3, 4	特定行為：気管カニューレの交換	気管カニューレの構造と選択 気管カニューレの抜去および交換困難とその対策 気管カニューレ交換の手順 気管カニューレ交換に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	1.5
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートに記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
4	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 長期呼吸療法における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理 長期呼吸療法の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分） 特定行為：気管カニューレの交換	筆記試験 (対面または E-ラーニング上での 実施)	1
5	OSCE	気管カニューレの交換		実技試験	
6	実習	気管カニューレの交換	患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	胸腔ドレーン管理関連		時間数の総計 15			
特定行為区分に含まれる特定行為に共通して学ぶべき事項	胸腔ドレーン管理の基礎知識	1. 胸腔ドレナージに関する局所解剖 2. 胸腔ドレナージを要する主要疾患の病態生理 3. 胸腔ドレナージを要する主要疾患のフィジカルアセスメント 4. 胸腔ドレナージの目的 5. 胸腔ドレナージの適応と禁忌 6. 胸腔ドレナージに伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義	4.5	5	
			試験	0.5		
特定行為ごとに学ぶべき事項	特定行為： 低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更	1. 低圧胸腔内持続吸引の適応と禁忌 2. 低圧胸腔内持続吸引に伴うリスク（有害事象とその対策等） 3. 低圧胸腔内持続吸引器のメカニズムと構造 4. 低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更方法	講義	2.5	4.5	
	演習	1.5				
	試験	0.5				
	実習	5症例	10			
	特定行為： 胸腔ドレーンの抜去	1. 胸腔ドレーンの抜去の適応と禁忌 2. 胸腔ドレーンの抜去に伴うリスク（有害事象とその対策等） 3. 胸腔ドレーンの抜去の方法と手技			講義	5
	試験	0.5			5.5	
実習	5症例					
担当指導者						
学習目標	胸腔ドレーン管理の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	胸腔ドレーン管理の基礎知識	胸腔ドレーン管理の知識・技術の基礎を身につける			
		特定行為：低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更	多様な臨床場面において、低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更を行うための知識・技術の基礎を身につける			
		特定行為：胸腔ドレーンの抜去	多様な臨床場面において、胸腔ドレーンの抜去の実施の可否判断、実施および報告の一連の流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける。			
研修方法 研修場所	胸腔ドレーン管理の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
		講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
	特定行為： 低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院	
	特定行為： 胸腔ドレーンの抜去		実技レクチャー 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院	
		演習（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	事例検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院	
		実習	患者に対する実技5症例 手順書の再評価		場所：太田西ノ内病院	
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 演習（面接授業）：グループディスカッションの観察評価、レポートの内容評価を行う 講義・演習により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価					

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4, 5, 6	胸腔ドレーン管理の基礎知識	呼吸器系の構造・機能 呼吸器系のフィジカルアセスメント 胸腔ドレナージの目的と適応 胸腔ドレナージを要する主要疾患の病態生理と治療 胸腔ドレーン挿入に伴う有害事象とその対策 胸腔ドレーン挿入中の管理 胸腔ドレーン留置に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	4.5
2	1, 2, 3, 4	特定行為： 低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更	低圧胸腔内持続吸引の適応と禁忌 低圧胸腔内持続吸引器のメカニズムと構造 低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定およびその変更方法 低圧胸腔内持続吸引に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	1
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示された低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更の事例について、ワークシートを記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
3	1, 2, 3	特定行為： 胸腔ドレーンの抜去	胸腔ドレーンの抜去の目的 胸腔ドレーンの抜去の適応と禁忌 胸腔ドレーンの抜去の方法と手技 胸腔ドレーンの抜去に伴うリスク・有害事象とその対策 結紮・縫合の方法	講義 (放送授業)	2
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けてどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
4	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 胸腔ドレーン管理の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分×2） 特定行為：低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更 特定行為：胸腔ドレーンの抜去	筆記試験 (対面またはE-ラーニング上での実施)	1.5
5	実習 低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びその変更		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
6	実習 胸腔ドレーンの抜去		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	腹腔ドレーン管理関連		時間数の総計 8.5		
特定行為区分に含まれる 特定行為に 共通して 学ぶべき事項	腹腔ドレーン管理の基礎知識	1. 腹腔ドレナージに関する局所解剖 2. 腹腔ドレナージを要する主要疾患の病態生理 3. 腹腔ドレナージを要する主要疾患のフィジカルアセスメント 4. 腹腔ドレナージの目的 5. 腹腔ドレナージの適応と禁忌 6. 腹腔ドレナージに伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義	3.5	4
			試験	0.5	
特定行為ごとに 学ぶべき事項	特定行為： 腹腔ドレーンの抜去（腹腔内に留置された 穿刺針の抜針を含む。）	1. 腹腔ドレーンの抜去の適応と禁忌 2. 腹腔ドレーンの抜去に伴うリスク（有害事象とその対策等） 3. 腹腔ドレーンの抜去の方法と手技	講義	4	4.5
			試験	0.5	
			実習	5症例	
担当指導者					
学習目標	腹腔ドレーン管理の基礎を理解し、 特定行為を適切に行うための知識・ 技術を身につける	腹腔ドレーン管理の 基礎知識	腹腔ドレーン管理の知識・技術の基礎を身につける		
		特定行為： 腹腔ドレーンの抜去（腹腔内 に留置された穿刺針の 抜針を含む。）	多様な臨床場面において、腹腔ドレーンの抜去（腹腔内に留置された穿刺針の抜針を含む。）の実施の可否判断、実施および報告の一連の流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける		
研修方法 研修場所	腹腔ドレーン管理の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
		講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	特定行為： 腹腔ドレーンの抜去（腹腔内に留置された 穿刺針の抜針を含む。）	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面ま たはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院	
		実習	患者に対する実技5症例 手順書の再評価	場所：太田西ノ内病院	
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにEラーニングで事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 講義により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価				

通番	学ぶべき 事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4, 5, 6	腹腔ドレーン管理の基礎知識	腹腔ドレナージの目的と種類 腹腔ドレナージに関する局所解剖 腹腔ドレナージを要する主要疾患の病態生理 ドレーンの管理 創傷滲出液の管理 腹腔ドレナージに伴う有害事象とその対策 腹腔ドレナージに伴う皮膚障害とその対策	講義 (放送授業)	3.5
2	1, 2, 3	特定行為： 腹腔ドレーンの抜去（腹腔内に留置された 穿刺針の抜針を含む。）	腹腔ドレーン抜去の適応と禁忌 腹腔ドレーンの抜去方法 腹腔ドレーンの抜去に伴う有害事象	講義 (放送授業)	1
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
3	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 腹腔ドレーン管理の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分） 特定行為：腹腔ドレーンの抜去（腹腔内に留置された穿刺針の抜針を含む。）	筆記試験 (対面または Eラーニング上での 実施)	1
4	実習 腹腔ドレーンの抜去（腹腔内に留置された穿刺針の抜 針を含む。）		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	栄養に係るカテーテル管理（中心静脈カテーテル管理）関連		時間数の総計 7.5		
特定行為区分に含まれる 特定行為に共通して 学ぶべき事項	中心静脈カテーテル管理の基礎知識	1. 中心静脈カテーテルに関する局所解剖 2. 中心静脈カテーテルを要する主要疾患の病態生理 3. 中心静脈カテーテルを要する主要疾患のフィジカルアセスメント 4. 中心静脈カテーテルの目的 5. 中心静脈カテーテルの適応と禁忌 6. 中心静脈カテーテルに伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義	2.5	3
			試験	0.5	
特定行為ごとに 学ぶべき事項	特定行為： 中心静脈カテーテルの抜去	1. 中心静脈カテーテルの抜去の適応と禁忌 2. 中心静脈カテーテルの抜去に伴うリスク（有害事象とその対策等） 3. 中心静脈カテーテルの抜去の方法と手技	講義	4	4.5
			試験	0.5	
			実習	5症例	
担当指導者					
学習目標	中心静脈カテーテル管理の基礎を理解し、 特定行為を適切に行うための知識・技術を 身につける	中心静脈カテーテル管理の基 礎知識	中心静脈カテーテル管理の知識・技術の基礎を身につける		
		特定行為： 中心静脈カテーテルの抜去	多様な臨床場面において、中心静脈カテーテルの抜去の可否判断、実施および報告の一連の流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける		
研修方法 研修場所	中心静脈カテーテル管理の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
		講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	特定行為： 中心静脈カテーテルの抜去	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面ま たはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院	
		実習	実技レクチャー 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院	
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 講義により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する				
	実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価				

通番	学ぶべき 事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4, 5, 6	中心静脈カテーテル管理の基礎知識	中心静脈カテーテルの目的と適応 中心静脈カテーテルを要する主要疾患の病態生理 中心静脈カテーテルに関する局所解剖 中心静脈カテーテルの挿入方法 中心静脈カテーテルの管理方法 中心静脈カテーテルに伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2.5
2	1, 2, 3	特定行為： 中心静脈カテーテルの抜去	中心静脈カテーテルの抜去の適応 中心静脈カテーテルの抜去方法 中心静脈カテーテルの抜去に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	1
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
3	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 中心静脈カテーテル管理の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分） 特定行為：中心静脈カテーテルの抜去	筆記試験 (対面または E-ラーニング上での 実施)	1

4	実習 中心静脈カテーテルの抜去	患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
---	-----------------	---	----	--

備考	
----	--

区分別科目名	栄養に係るカテーテル管理（末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理）関連			時間数の総計 8.5		
特定行為区分に含まれる 特定行為に共通して 学ぶべき事項	末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理の基礎知識	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルに関する局所解剖</li> <li>2. 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルを要する主要疾患の病態生理</li> <li>3. 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルを要する主要疾患のフィジカルアセスメント</li> <li>4. 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの目的</li> <li>5. 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの適応と禁忌</li> <li>6. 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルに伴うリスク（有害事象とその対策等）</li> </ol>	講義	2.5	3	
			試験	0.5		
特定行為ごとに 学ぶべき事項	特定行為： 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入の適応と禁忌</li> <li>2. 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入に伴うリスク（有害事象とその対策等）</li> <li>3. 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入の方法と手技</li> </ol>	講義	5	5.5	
			試験	0.5		
			OSCE			
			実習	5症例		
担当指導者						
学習目標	末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理の基礎知識	末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理の知識・技術の基礎を身につける			
		特定行為： 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入	多様な臨床場面において、末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入の実施の可否判断、実施および報告の一連の流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける			
研修方法 研修場所	末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 事前テスト（10分）</li> <li>2) 講義（PDF資料・動画）</li> <li>3) 事後テスト（20分）</li> </ol>			
		講義（放送授業）： Eラーニング	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 事前テスト（10分）</li> <li>2) 講義（PDF資料・動画）</li> <li>3) 事後テスト（20分）</li> </ol>			
	特定行為： 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院	
			実技レクチャー 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院	
		実習	患者に対する実技5症例 手順書の再評価		場所：太田西ノ内病院	
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 講義により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 「特定行為：末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入」では実技試験（OSCE）を行う 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価					

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4, 5, 6	末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理の基礎知識	末梢留置型中心静脈カテーテルの目的と適応 末梢留置型中心静脈カテーテルを要する主要疾病の病態生理 末梢留置型中心静脈カテーテルに関する局所解剖 超音波検査の基本と末梢留置型中心静脈カテーテル挿入における血管選定 末梢留置型中心静脈カテーテル挿入中の有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2.5
2	1, 2, 3	特定行為： 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入	末梢留置型中心静脈カテーテル挿入の適応と禁忌 末梢留置型中心静脈カテーテルの種類 末梢留置型中心静脈カテーテルの挿入方法 末梢留置型中心静脈カテーテル挿入に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートに記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
3	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分） 特定行為：末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入	筆記試験 (対面またはE-ラーニング上での実施)	1
4	OSCE	末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入		実技試験	
5	実習 末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	創部ドレーン管理関連		時間数の総計 7		
特定行為区分に含まれる 特定行為に共通して 学ぶべき事項	創部ドレーン管理の基礎知識	1. 創部ドレナージに関する局所解剖口 2. 創部ドレナージを要する主要疾患の病態生理口 3. 創部ドレナージを要する主要疾患のフィジカルアセスメント口 4. 創部ドレナージの目的口 5. 創部ドレナージの適応と禁忌口 6. 創部ドレナージに伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義	2	2.5
			試験	0.5	
特定行為ごとに 学ぶべき事項	特定行為： 創部ドレーンの抜去	1. 創部ドレーンの抜去の適応と禁忌 2. 創部ドレーンの抜去に伴うリスク（有害事象とその対策等） 3. 創部ドレーンの抜去の方法と手技	講義	4	4.5
			試験	0.5	
			実習	5症例	
担当指導者					
学習目標	創部ドレーン管理の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	創部ドレーン管理の基礎知識	創部ドレーン管理の知識・技術の基礎を身につける		
		特定行為： 創部ドレーンの抜去	多様な臨床場面において、創部ドレーンの抜去の可否判断、実施および報告の一連の流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける		
研修方法 研修場所	創部ドレーン管理の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
		講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	特定行為： 創部ドレーンの抜去	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院	
			実技レクチャー 1) 個人学習 2) 集合学	場所：太田西ノ内病院	
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 講義により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価				

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4, 5, 6	創部ドレーン管理の基礎知識	創部ドレナージの目的と適応 創部ドレーンの種類 創部ドレーンの管理方法 創傷滲出液の管理 創部ドレナージに伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2
2	1, 2, 3	特定行為： 創部ドレーンの抜去	創部ドレーン抜去の適応 創部ドレーン抜去の方法 創部ドレーン抜去に伴うリスク	講義 (放送授業)	1
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートに記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
3	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 創部ドレーン管理の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分） 特定行為：創部ドレーンの抜去	筆記試験 (対面またはE-ラーニング上での実施)	1
4	実習 創部ドレーンの抜去		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	動脈血液ガス分析関連		時間数の総計 10.5		
特定行為区分に含まれる 特定行為に共通して 学ぶべき事項	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の基礎知識	<ol style="list-style-type: none"> <li>動脈穿刺法に関する局所解剖</li> <li>動脈穿刺法に関するフィジカルアセスメント</li> <li>超音波検査による動脈と静脈の見分け方</li> <li>動脈血採取が必要となる検査</li> <li>動脈血液ガス分析が必要となる主要疾患とその病態</li> </ol>	講義	4.5	5
			試験	0.5	
特定行為ごとに 学ぶべき事項	特定行為： 直接動脈穿刺法による採血	<ol style="list-style-type: none"> <li>直接動脈穿刺法による採血の目的</li> <li>直接動脈穿刺法による採血の適応と禁忌</li> <li>穿刺部位と穿刺に伴うリスク（有害事象とその対策等）</li> <li>患者に適した穿刺部位の選択</li> <li>直接動脈穿刺法による採血の手技</li> </ol>	講義	5	5.5
			試験	0.5	
			OSCE		
			実習	5症例	
担当指導者					
学習目標	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析に関する基礎知識を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の基礎知識 特定行為： 直接動脈穿刺法による採血	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の知識・技術の基礎を身につける 多様な臨床場面において、直接動脈穿刺法による採血の可否判断、実施および報告の一連の流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける		
研修方法 研修場所	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
		講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	特定行為： 直接動脈穿刺法による採血	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院	
		実習	実技レクチャー 1) 個人学習 2) 集合学習 患者に対する実技5症例 手順書の再評価	場所：太田西ノ内病院	
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 講義により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 「特定行為：直接動脈穿刺法による採血」では実技試験（OSCE）を行う 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価				

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4, 5	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の基礎知識	動脈穿刺法に関する局所解剖 動脈穿刺法に関するフィジカルアセスメント 超音波検査による動脈と静脈の見分け方 動脈血採血が必要となる検査 動脈血液ガス分析が必要となる主要疾患とその病態	講義 (放送授業)	4.5
2	1, 2, 3, 4, 5	特定行為： 直接動脈穿刺法による採血	直接動脈穿刺法による採血の目的と適応 直接動脈穿刺法における穿刺部位の選択 直接動脈穿刺法における採血の手技 動脈穿刺に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
3	科目最終試験		共通して学ぶべき事項 (30分) 動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項 (30分) □ 特定行為：直接動脈穿刺法による採血	筆記試験 (対面またはE-ラーニング上での実施)	1
4	OSCE	直接動脈穿刺法による採血		実技試験	
5	実習	直接動脈穿刺法による採血	患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連		時間数の総計 12		
特定行為区分に含まれる特定行為に共通して学ぶべき事項	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	1. 循環動態に関する局所解剖 2. 循環動態に関する主要症候 3. 脱水や低栄養状態に関する主要症候 4. 輸液療法の目的と種類	講義	5.5	6
	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 輸液療法	5. 病態に応じた輸液療法の適応と禁忌 6. 輸液時に必要な検査 7. 輸液療法の計画	試験	0.5	
特定行為ごとに学ぶべき事項	特定行為： 持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整	1. 低栄養状態に関する局所解剖 2. 低栄養状態の原因と病態生理 3. 低栄養状態に関するフィジカルアセスメント 4. 低栄養状態に関する検査	講義	4	6
		5. 高カロリー輸液の種類と臨床薬理 6. 高カロリー輸液の適応と使用方法	演習	1.5	
		7. 高カロリー輸液の副作用と評価 8. 高カロリー輸液の判断基準（ペーパーシミュレーションを含む）	試験	0.5	
		9. 低栄養状態の判断と高カロリー輸液のリスク（有害事象とその対策等） 10. 高カロリー輸液に関する栄養学	実習	5症例	
担当指導者					
学習目標	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	栄養及び水分管理に関わる薬剤投与の知識・技術の基礎を身につける 循環動態に関する解剖と病態生理の知識・技術の基礎を身につける 栄養及び水分管理に関わる薬剤投与の知識・技術の基礎を身につける 輸液療法の知識・技術の基礎を身につける		
		栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 輸液療法			
		特定行為： 持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整	多様な臨床場面において、持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整を行うための知識・技術の基礎を身につける		
研修方法	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 輸液療法	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	特定行為： 持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院
		演習（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	事例検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院
		実習	患者に対する実技5症例 手順書の再評価		場所：太田西ノ内病院
評価方法	講義（放送授業）：各単元ごとにEラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 演習（面接授業）：グループディスカッションの観察評価、レポートの内容評価を行う 講義・演習により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価				

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 5	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	循環器系の構造・機能 循環器系の症候 血管の構造と血圧調節機構 脱水・低栄養状態の主要徴候 低ナトリウム血症・高ナトリウム血症の病態と補正 低カリウム血症・高カリウム血症の病態と補正 酸塩基平衡	講義 (放送授業)	2.5
2	4, 5, 6, 7	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 輸液療法	輸液療法の目的と投与経路 輸液の基本事項 輸液の分類 水分補給液、電解質輸液、補正用電解質液、アルカリ化剤、特殊輸液の種類と選択 末梢静脈栄養法に使用する輸液製剤の種類 中心静脈栄養法に使用する輸液製剤の種類 脱水・輸液の方法	講義 (放送授業)	3
3	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10	特定行為： 持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整	低栄養状態に関する基本的知識 低栄養状態の病態生理 栄養管理プロセス 栄養アセスメントの目的と実施のタイミング 経静脈栄養法の適応 高カロリー輸液における栄養管理の計画 高カロリー輸液に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2.5
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートに記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示された持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整の事例について、ワークシートに記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
4	科目最終試験		共通して学ぶべき事項 (30分) 栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理 栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 輸液療法 特定行為ごとに学ぶべき事項 (30分) 特定行為：持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整	筆記試験 (対面または E-ラーニング上での 実施)	1
5	実習 持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	術後疼痛管理関連		時間数の総計 8.5		
特定行為区分に含まれる特定行為に共通して学ぶべき事項	術後疼痛管理の基礎知識	1. 硬膜外麻酔に関する局所解剖 2. 硬膜外麻酔を要する主要疾患の病態生理 3. 硬膜外麻酔を要する主要疾患のフィジカルアセスメント 4. 硬膜外麻酔の目的 5. 硬膜外麻酔の適応と禁忌 6. 硬膜外麻酔に伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義	3.5	4
			試験	0.5	
特定行為ごとに学ぶべき事項	特定行為： 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整	1. 硬膜外麻酔薬の選択と投与量 2. 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整の方法	講義	2.5	4.5
			演習	1.5	
			試験	0.5	
			実習	5症例	
担当指導者					
学習目標	術後疼痛管理の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	術後疼痛管理の基礎知識	術後疼痛管理の知識・技術の基礎を身につける 硬膜外麻酔管理の知識・技術の基礎を身につける		
		特定行為： 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整	多様な臨床場面において、硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整を行うための知識・技術の基礎を身につける		
研修方法 研修場所	術後疼痛管理の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
		講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）		
	特定行為： 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院
		演習（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	事例検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院
		実習	患者に対する実技5症例 手順書の再評価		場所：太田西ノ内病院
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 演習（面接授業）：グループディスカッションの観察評価、レポートの内容評価を行う 講義・演習により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価				

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4, 5, 6	術後疼痛管理の基礎知識	硬膜外麻酔の目的 硬膜外麻酔の適応と禁忌 硬膜外麻酔に関する解剖と生理 硬膜外麻酔に関するフィジカルアセスメント 硬膜外麻酔の穿刺方法 硬膜外麻酔の管理 硬膜外麻酔に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	3.5
2	1, 2	特定行為： 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整	術後痛の評価 硬膜外麻酔における薬剤の特徴 硬膜外麻酔における薬剤選択と投与量 硬膜外カテーテルによる鎮痛薬の投与および投与量の調整方法	講義 (放送授業)	1
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートに記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受け、自身が手順書案を作成する際に工夫したい点、修正したい点などをワークシートに記載し、指導者に提出する	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示された硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整の事例について、ワークシートに記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
3	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 術後疼痛管理の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分） 特定行為：硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整	筆記試験 (対面またはE-ラーニング上での実施)	1
4	実習 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	循環動態に係る薬剤投与関連		時間数の総計 17.5			
特定行為区分に含まれる特定行為に共通して学ぶべき事項	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 循環動態に関する局所解剖</li> <li>2. 循環動態に関する主要症候</li> <li>3. 循環動態の薬物療法を必要とする主要疾患の病態生理</li> <li>4. 循環動態の薬物療法を必要とする主要疾患のフィジカルアセスメント</li> </ol>	講義	7.5	8	
	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 循環動態のアセスメントと輸液療法の基本	<ol style="list-style-type: none"> <li>5. 輸液療法の目的と種類</li> <li>6. 病態に応じた輸液療法の適応と禁忌</li> <li>7. 輸液時に必要な検査</li> <li>8. 輸液療法の計画</li> </ol>	試験	0.5		
特定行為ごとに学ぶべき事項	特定行為： 持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. カテコラミン製剤の種類と臨床薬理</li> <li>2. 各種カテコラミン製剤の適応と使用方法</li> <li>3. 各種カテコラミン製剤の副作用</li> <li>4. 病態に応じたカテコラミンの投与量の調整の判断基準（ペーパーシミュレーションを含む）</li> <li>5. 持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整のリスク（有害事象とその対策等）</li> </ol>	講義	2.5	4.5	
			演習	1.5		
			試験	0.5		
	特定行為： 持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 糖質輸液、電解質輸液の種類と臨床薬理</li> <li>2. 各種糖質輸液、電解質輸液の適応と使用方法</li> <li>3. 各種糖質輸液、電解質輸液の副作用</li> <li>4. 病態に応じた糖質輸液、電解質輸液の調整の判断基準（ペーパーシミュレーションを含む）</li> <li>5. 持続点滴中の糖質輸液、電解質輸液の投与量の調整のリスク（有害事象とその対策等）</li> </ol>	実習	5症例	9.5	
			講義	3		
			演習	1.5		
		試験	0.5			
		実習	5症例			
担当指導者						
学習目標	循環動態に関する薬剤投与の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理  循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 循環動態のアセスメントと輸液療法の基本	循環動態に関する薬剤投与の知識・技術の基礎を身につける 循環動態に関する解剖と病態生理の知識・技術の基礎を身につける 循環動態のアセスメントと輸液療法の基礎を身につける			
		特定行為： 持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整	多様な臨床場面において、持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整を行うための知識・技術の基礎を身につける			
		特定行為： 持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整	多様な臨床場面において、持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整を行うための知識・技術の基礎を身につける			
研修方法 研修場所	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理  循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 循環動態のアセスメントと輸液療法の基本	講義（放送授業）： Eラーニング	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 事前テスト（10分）</li> <li>2) 講義（PDF資料・動画）</li> <li>3) 事後テスト（20分）</li> </ol>			
		講義（放送授業）： Eラーニング	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 事前テスト（10分）</li> <li>2) 講義（PDF資料・動画）</li> <li>3) 事後テスト（20分）</li> </ol>			
	特定行為： 持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院		
	特定行為： 持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整	演習（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	事例検討 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院		
	実習	患者に対する実技5症例 手順書の再評価	場所：太田西ノ内病院			
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 演習（面接授業）：グループディスカッションの観察評価、レポートの内容評価を行う 講義・演習により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する  実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価					

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 と病態生理	解剖 循環器系の構造・機能 循環器系の診察・検査・画像 循環器系の症候・疾患 循環器系の主要疾患の病態生理	講義 (放送授業)	4.5
2	1, 4, 5, 6, 7, 8	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 循環動態のアセスメントと輸液療法の基本	循環器系のフィジカルアセスメント 輸液療法の目的と投与経路 輸液の基本事項と方法	講義 (放送授業)	3
3	1, 2, 3, 4, 5	特定行為： 持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整	カテコラミン製剤の種類と特徴 カテコラミン製剤の適応と使用方法 カテコラミンの投与量の調整方法 カテコラミンの投与量の調整に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	1
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示された持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整の事例について、ワークシートを記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
4	1, 2, 3, 4, 5	特定行為： 持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整	水分補給液と電解質輸液の種類と選択 輸液の投与量と速度の決定方法 糖質輸液、電解質輸液の適応と使用方法 糖質輸液、電解質輸液の投与量の調整	講義 (放送授業)	1.5
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示された持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整の事例について、ワークシートを記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
5	科目最終試験		共通して学ぶべき事項 (30分) 循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理 循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 循環動態のアセスメントと輸液療法の基本 特定行為ごとに学ぶべき事項 (30分×2) 特定行為：持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整 特定行為：持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整	筆記試験 (対面またはE-ラーニング上での実施)	1.5
6	実習 持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
7	実習 持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					